アブドゥッラー・フサインの青年時代
脱植民地化期マラッカ海峡両岸地域の言語体験

西 芳実

1. はじめに

本稿は、マレーシアの国民的文学者アブドゥッラー・フサイン（Abdullah Hussain）の自伝『ある旅路』（Sebuah Perjalanan）のうち、1940年代半ばから1950年代半ばまでの時期を描いた章（「戦争勃発」「行き当たりばったり」「雑誌記者」）を取り上げ、当時の時代背景の中にアブドゥッラーの遍歴を位置づける。

本稿は、アブドゥッラーの子供時代の文化・メディア体験を整理した［西 2020］およびアブドゥッラーがペナンのマレー語出版界で活動していた時期を整理した［西 2021］の続きにあたる。アブドゥッラーの位置づけや経歴については［西 2020］を参照していただきたい。また、本稿は、20世紀前半のマレー世界における出版や執筆を通じた人々の交流およびそれを通じた思想の流通についての研究の一部であり、アブドゥッラーの人生遍歴に関わる人物名をなるべく多く記載するように心がけている。言及される人物については可能な限り経歴等を記載しているが、［西 2020］や［西 2021］で紹介済みの人物などについては本稿では説明を省略しているものがある[1]。

2. スマトラでの「青年」時代——冒険の始まり

クダで知り合いの縫物店の仕事を手伝うようになったアブドゥッラーは、縫物店に顧客として来ていたスンガイ・ラヤルのイギリス空軍兵士たちと知り合いになり、やがてイギリス軍の専属洗濯屋の小間使いとなった。第二次世界大戦が勃発し、日本軍がマレー半島に侵攻したことでアブドゥッラーは職を失い、故郷のヤンに帰った。

日本軍による占領から一か月後、アブドゥッラーはスマトラ島上陸のための工作員として藤原機関にリクルートされ、クアラルンプールに移動した[2]。スマトラ島に上陸したアブドゥッラーは東インド政庁に逮捕され、メダンで拘留された。日本軍がスマトラに上陸して拘留を解かれると、アブドゥッラーはアチェの軍政部での仕事を与えられた。その間、シンガポールに派遣されて昭南興亜訓練所で3か月の研修を受けた。

シンガポールでの研修を終え、アブドゥッラーはアチェ州のランサの軍政部の仕事を充てられた。アチェはアブドゥッラーの父親の出身地だった。ペナンでの出版業での経験を活かし、『アチェ・シンブン』（*Aceh Shimbun*）の記事を執筆して刊行を助けた。第二次世界大戦中に執筆した作品に、歴史小説「復讐の血」（Darah Pembalasan）や短編小説「新しい人間」（Manusia Baru、1943年）がある[3]。

アブドゥッラーが藤原機関に参加した理由は、冒険心とあこがれの地であるスマトラに行くためだった。ペナンでアブドゥッラーが目にしたマレー語出版物の主な書き手や編集者はスマトラ出身者であり、当時のマレー語出版の中心地はメダンであると目されていた。アブドゥッラーはメダンで刊行された雑誌や冒険小説を好んで読んでいた。それらの書物は、理想に燃える民族主義青年にあこがれていたアブドゥッラーの嗜好にあっていた[4]。

メダンでは東インド政庁に逮捕されて収監されたが、機会を見つけては雑誌・新聞の編集部、出版社、作家を訪問していた。クアラルンプールにあった「イン

1）本稿で登場する人物の名前は初出時にローマ字表記を記している。尊称はアブドゥッラーの著作の記述にしたがって記載する。ただし日本語の表記では、生まれながらに得ているもの以外の尊称は除外した。

2）アブドゥッラーが藤原機関にリクルートされて以降、第二次世界大戦下でのアブドゥッラーの活動の詳細はアブドゥッラーの自伝的小説『罠に落ちる』（Terejebak）、インドネシア独立戦争期のアチェでの活動は『事件』（Peristiwa）、ペナンを拠点にアチェとタイの間で行っていた武器密輸を始めとする交易活動については『求めたわけではない』（Aku Tidak Minta）に記されている。本稿では、言語・メディア体験を中心に記述されている『ある旅路』の記述にもとづいてこの時期のアブドゥッラーの活動を整理している。

3）いずれも公刊されていない。

4）メダンを訪れたのは初めてだったが、小説を読んでいたため初めての気がしなかったという。

ドネシアの家」の友人でミナンカバウ人のボルハン（Burhan）の案内で、1930年代末に大衆小説誌『ルキサン・プジャンガ』を刊行していたプスタカ・チュルダス社（Poestaka Tjerdas）や、同じく大衆小説誌『パンジ・イスラム』（*Pandji Islam*、「イスラムの旗」）を刊行していたプスタカ・イスラム社（Poestaka Islam）を訪ね、作家や編集者に会おうとした。ペナンでインドネシアの著述家たちの作品や記事に感銘を受けていたアブドゥッラーにとって、彼らは映画スターのようなものだった。

収容所では、クアラルンプールで日本軍から渡されたお金を数人で持ち寄って新聞を買っていた。好んで読んだのは『プワルタ・デリ』（*Pewarta Deli*、「デリの通信員」）だった。アブドゥッラーは『プワルタ・デリ』の主筆であるアディヌゴロ（Adinegoro）[5]の記事について、鋭い批判を含むが言葉の選び方がうまいため東インド政庁に文句を言われず、文意をくみ取れるものだけが意図を理解する記事だったと評している［Abdullah 1985：333］。

日本軍の上陸によってメダンでの拘留を解かれたアブドゥッラーがマラヤに戻りたくないと考えていたところ、藤原機関がアブドゥッラーをアチェ州クタラジャ（現在のバンダアチェ）に呼びよせた。藤原機関はアブドゥッラーに日本軍の広報活動を担当させた。アブドゥッラーはアチェ語をほとんど話せなかったため、村人とのやりとりは通訳を使った[6]。また、マラヤで手に入れられなかった書物[7]を手に入れた。クタラジャで『アチェ・シンブン』に記事を寄稿した時は、マラヤとインドネシアの綴りや言葉の違いに苦労した。

第二次世界大戦が終わり、アブドゥッラーは東アチェのランサでインドネシア共和国政府の警察長官に任命された。東アチェで社会革命がおこり、混乱を収拾した際の手腕を買われてランサ市長に任命された。オランダ軍がスマトラ島に再上陸したことを受けて1947年にウェ島サバンの警察長官の職に就いた。オランダとの戦争が激化すると、インドネシア共和国政府の代理としてペナン[8]やプーケットに派遣され、共和国政府の活動資金を支援する交易会社[9]の業務に携わった。アチェとマラヤやプーケットとの往来はゴム運搬船を利用し、パスポートは英国臣民パスポートを使用した。

ランサでは出版や著述業も行った。雑誌『トゥラン・ブラン』（*Terang Bulan*、「月光」）[10]の刊行の資金集めのために演劇を興行した[11]。『ミンバル・インドネシア』（*Mimbar Indonesia*、「インドネシアの論壇」）にマラヤにおけるイギリス統治を批判する記事とビルマのムスリムについての記事が掲載された[12]。

インドネシア独立戦争が終結すると、アブドゥッラーは1950年に雑誌『プスパ』（*Puspa*、「花」）[13]の編集者としてメダンに戻った。『プスパ』は、アチェで生じたチュンボック事件[14]について、ダウド・ブルエとフシン・アミルディンら「革命」側の行動を批判する記事を掲載してメダンで人気を博した。

メダン滞在中、アブドゥッラーは「世界労働者の日」短編小説コンテストに応募して「農園労働者カリオ」（Kario Buruh Kebun）で優勝した。東ベルリンで開催された青年フェスティバルへの参加を予定していた。世界に向けて執筆したアブドゥッラーにとってヨーロッパに行くまたとない機会だったが、渡航手続きに不備があったために渡航を断念した。

3. 混成社会シンガポールでの生活——華人との交流

1949年末にオランダからインドネシアに主権が委譲されたとき、アブドゥッラーはペナンにいた。ペナンのインドネシア人はマラヤのマレー人に共産主義思想を吹き込んだりマラヤ独立を策動したりしてい

5）ドイツでジャーナリズムを学び、インドネシア人記者の中ではもっとも高給取りと言われていた。

6）アチェの村では日本軍が求めるプロパガンダをアチェ語で行った。アブドゥッラーはそれを聞いているだけでよかった。アブドゥッラーは父母の会話から知る簡単なアチェ語の単語を50くらいしか知らなかった。アチェで暮らすうちに何が話されているのか理解できるようになったという。

7）スカルノとハッタの著作やマトゥ・モナが経営するチェンドラワシ（Tjendarawasih）社刊行の書籍など。

8）ペナンではマラヤ・ムラユ民族党（Parti Kebangsaan Melayu Malaya、PKMM）のアブドゥル・ラーマンに連れられてイポーとクアラルンプールへいき、ブルハヌディンほかPKMM関係者に会っている。

9）セントラル・トレーディング社。シャフリル内閣の経済担当大臣だったA.K.ガニがアチェのインドネシア国軍に資金援助するために1946年にシンガポールに設立したアチェ・トレーディング社（Aceh Trading Company）［Yong 2003：50］を前身とし、ジャカルタに本社があった。

10）スラバヤで刊行されていた『*Terang Bulan*』にならったもの。

11）1948年2月に一号を出したが、刊行を続けることはできなかった。

12）ペンネームはA.A.だった。

13）プーケット滞在時に謄写版印刷で『プスパ』を刊行したとの説もある。

14）1945年12月から1946年1月にかけて、アチェの北部海岸部でフシン・アミルディンが社会革命を主張してウレーバラン（原住民首長層）を虐殺した事件。アチェの社会革命については［Reid 1979］を参照。アブドゥッラーは、チュンボック事件の「革命」側は虐殺者であるとして厳罰を求める立場をとっていた。

るとイギリス政庁に疑われており、アブドゥッラーは自分もイギリス政庁に目を付けられていると考え、ペナンや出身地のヤンに戻ることは難しいと考えていた。そのような折に、ペナンで交易会社に勤めていた際に直属の上司だったオスマン・アダミ（Osman Adamy）[15]から、シンガポールに開業した貿易会社[16]の経営を手伝ってほしいと頼まれ、1951年にシンガポールに移住した[17]。

1961年にクアラルンプールに拠点を移すまでのおよそ10年間、アブドゥッラーはシンガポールで様々な活動にかかわった。貿易会社の事務補佐や経営、インドネシアの雑誌や新聞の記者、映画制作、娯楽雑誌の編集などである。アチェのダルル・イスラム運動に関連してベトナム、フィリピン、香港にも渡航した。

アブドゥッラーが職を得た貿易会社の事務スタッフは半数以上が華人で、華人との仕事は避けられなかった[18]。 華人が多いシンガポールでアブドゥッラーは華人との付き合いを急速に増やしていった。マレー人の友人の紹介で華人の知識人や政治家とつきあうようになり、華語の学習も始めた。

アブドゥッラーにはペナンのペンフレンド同盟での活動を通じて知り合った友人アブドゥル・マジド・オスマン（Abdul Majid Othman、以下アブドゥル・マジド）がいた。中華民国の奨学金で南京の国立中央大学に留学中に国共内戦が勃発し、南京から台湾へ避難するための資金援助をマラヤとシンガポールの華人団体に求めた経験を持ち、シンガポールの華人社会に多くの知己を有していた。アブドゥッラーはアブドゥル・マジドの紹介で華人の知識人や政治家とつきあうようになった。

アブドゥル・マジドに紹介を受けた華人の一人が、『南洋新報』編集者でイスラム教徒のシャムスディン・トゥン・タウチャン（Shamsuddin Tung Tau Chang、以下トゥン）[19]だった。トゥンは、午前は私立の華語中学校で教鞭をとり、午後は自動車会社の広告部門に勤め、夜間は『南洋新報』の編集者として働いていた。トゥンの妻アリヤはラジオ・マラヤで華語放送のアナウンサーをしていた。トゥン一家はマレー語も英語もそれほど流暢ではなかった。アブドゥル・マジドとトゥンの勧めでアブドゥッラーは毎日夕方にトゥンの家を訪問して華語のレッスンを受けた。その後も華語の夜間学校[20]に通い、華人の客や取引相手に華語まじりで会話ができるようになった。

アブドゥッラーが華語を学んだ背景には、マラヤ華人協会（MCA）総裁のタン・チェンロクに、華人の信頼を得たければ華語を学ぶよう助言されたことが大きかった。タンはシンガポール訪問時にアブドゥル・マジドを呼び、アブドゥル・マジドがアブドゥッラーを同伴したことから、アブドゥッラーもタンと知り合うようになった。アブドゥッラーはタンに同伴してシンガポール中華総商会の会合に出席したり、タンから政治的意見を求められたりした[21]。

アブドゥル・マジドに紹介された『星洲日報』（Sin Chew Jit Pao）の編者で作家の李学敏[22]とは雑誌を共同で編集するようになるほど親交を深めた。李はアブドゥッラーの出身地のクダ州に隣接するペラ州で1923年に生まれ、1940年代をスマトラやジャワで過ごし、1948年にシンガポールに移住しており、アブドゥッラーと年齢も経歴も共通する点があった。李は星洲日報社への出勤前にアブドゥッラーが働く貿易会社に立ち寄り、文学について語り合うのが常だった。李はマレー語を通じた多民族の統合を信じ

15）オスマン・アダミは1945年末にアチェで社会革命が発生した際、アブドゥッラーに銃をつきつけて郡長職を引き受けるよう迫った。

16）オスマン・アダミはセントラル・トレーディング社から独立してシンガポールにアチェ・ トレーディング＆シッピング社（Aceh Trading & Shipping Company）を開業した。後に社名をエンパイア・トレーディング社（Empire Trading Company）に変更した。

17）シンガポール移住について、アブドゥッラーは、インドネシアはすでにオランダから独立していたためインドネシアを去ることに感慨はなかったが、イギリス統治下にあって10年間離れていたマラヤとシンガポールに向かうことへの不安を感じていたという［Abdullah 1985: 456］。

18）シンガポールでオスマン・アダミはアチェ出身の華人を妻帯していた。

19）トゥンは中国国民党マラヤ代表部の娘婿で、シンガポールやマレーシアの新聞で反共的記事を多数執筆した。息子にヌル・ムハマド（Noor Muhammad）と名付けた。米国諜報部の支援でアメリカン大学に留学した。シンガポール連盟党（Singapore Alliance Party）の副総裁を務め、1963年に連盟党候補として出馬し落選した。1965年にクアラルンプールに移住し、ムスリム・レストランや台湾資本の百貨店を開店した。1970年3月にシンガポールに戻り、『南洋新報』の編集長になった。『南洋新報』はトゥンのもとで言語的・文化的紐帯を重視する編集方針に変わった。

20）華人が多数派であるシンガポールで商売を成功させるために華語を学ぶインド人が多く通っていた。

21）会合にさきだってアブドゥッラーとアブドゥル・マジドは台湾政府からの招待を受け入れるべきかどうかタン・チェンロクから意見を求められた。アブドゥッラーは、タン・チェンロクはマラヤ華人の代表であるにもかかわらず台湾政府はタン・チェンロクを在外華人（rakyat Cina seberang laut）としてしか扱っていないので招待を受け入れるべきではないし、もし台湾政府の招待を受け入れるならばタン・チェンロクを自分たちの指導者とは思わないと訴えた［Abdullah 1985: 488］。

22）筆名はルー・ポーイエ（Lu Po Yeh／魯白野）。詳しくは［篠崎 2020］［篠崎 2021］を参照。

ており、マレー人と華人が互いの文化を理解しあうためにマレー語やマレー文化に関する書籍や記事を華語に翻訳する活動をしていた。華語の文化誌の文学欄にインドネシアの代表的詩人ハイリル・アンワル（Chairil Anwar）[23]の詩の華語翻訳を掲載するなどして、インドネシア語の文学作品を華語に紹介する活動をしていたのも李だった。アブドゥッラーは李を通じてシンガポールの華人作家と知り合うようになった。いずれもマレー語を使いこなし、中にはマレー語・華語辞書を編纂した者もいた。李の誘いでマレー語と華語の二言語による雑誌『マレー語月刊』（*Majalah Bahasa Melayu*／馬来語月刊）の共同編者になった[24]。

4. インドネシアの新聞・雑誌への寄稿

貿易会社で働くかたわら、アブドゥッラーはメダンにいた頃のようにインドネシアの新聞や雑誌に記事を寄稿した。シンガポールに到着してほどなく、インドネシア共和国独立とともに創刊され、政府批判の記事を掲載することで知られていた『インドネシア・ラヤ』（*Indonesia Raya*）紙[25]に、インドネシアの出入国管理局における手続きの煩雑さと、その手続きを係官が恣意的に簡略化する状況を告発する記事を寄稿した[26]。

インドネシアの出入国管理局からアブドゥッラーの記事を否定する反論が同紙に寄せられた。アブドゥッラーは抜き打ち検査の実施を提案する記事を再寄稿した。アブドゥッラーのこれらの記事は雑誌『出入国管理』（*Majalah Imigrasi*）に転載され、インドネシアの出入国管理局の衆目の知るところとなった。新聞を通じてインドネシア国外のシンガポールからインドネシア政府の問題を指摘して政府から応答を得られたことは、アブドゥッラーにとって社会の声を公に伝えるメディアとしての新聞の機能を実感させるできごとだった。

ただし、その結果としてアブドゥッラーはインドネシアの出入国管理局に目をつけられた。インドネシアに残した妻[27]が病死したとの知らせを受けてインドネシアに入国した際、アブドゥッラーが書いた記事を理由にメダンのポロニア空港の出入国管理局で担当者にパスポートを没収された。書いた記事によって人々に認められたいというアブドゥッラーの幼少期からの希望が皮肉な形で実現したかっこうになった。

『インドネシア・ラヤ』以外にもアブドゥッラーはインドネシアの新聞[28]に寄稿し、このうち、ブルハヌッディン・ムハマド・ディア（Burhanuddin Mohamad Diah、以下B.M.ディア）が経営・編集する日刊紙『ムルデカ』（*Merdeka*、「独立」）[29]からは掲載紙と原稿料が届き、アブドゥッラーの記事を定期的に掲載する「外国世界から」というコーナーがつくられた。

B.M.ディアは、1912年に東インド党を結成するなどしてインドネシア民族主義の先駆者として知られるダウウェス・デッケルから手ほどきを受けた著名なジャーナリストであり、クタラジャでアチェ人の母から生まれたアチェ出身者だった[30]。雑誌『ムルデカ』（日刊紙とは別のもの）の編集長であるディアの妻はアメリカでジャーナリズムを学び学士を取得し

23）1922年北スマトラ生まれ。1943年に詩壇に登場し、インドネシアの文学界における「1945年世代」を代表する詩人。

24）自伝によればアブドゥッラーが『グランガン・フィルム』（*Gelanggang Filem*、「映画のステージ」）で働いている頃のことだとあり、1958年3月以降のことと思われる。

25）インドネシア共和国がオランダから主権を移譲された日の二日後にあたる1948年12月29日にジャカルタで創刊された。1950年8月からモフタル・ルビスが編集長となった。政府批判の記事を掲載すべきと考えるモフタル・ルビスと政府に中立であるべきとするサルヒンディの対立が激化し、1959年はじめに停刊した。スマトラ島やスラウェシ島における反乱が激化するとともに部数を伸ばし、1958年末には47,500部に達していた。

26）アブドゥッラーによれば、出入国管理局に顔がきく華人には「抜け道」があり、煩雑な手続きを経ずにすんでいた。

27）アブドゥッラーはアチェ州ランサでアチェ人と結婚していた。

28）『アバディ』（*Abadi*、「永遠」）、『ナシオナル』（*Nasional*、「ナショナル」）、『ビンタン・ティムル』（*Bintang Timur*、「東の星」）など。このうち『アバディ』はマシュミ党、『ビンタン・ティムル』はインドネシア党の新聞である。

29）1945年10月1日刊行開始。副編集長はユスフ・イサク、編集にロシハン・アンワルが参加した。B. M.ディアは日本の敗戦直後にユスフ・イサクやロシハン・アンワルとともに日本の『ジャワ・シンブン』印刷所を奪い、この印刷所で独立宣言を多数印刷した。

30）B.M.ディアは1917年4月7日生まれ。父は北スマトラのバルス出身で、西アチェの税関職員から通訳になった。B.M.ディアの生後すぐに父が死去したため、母が金・宝飾品や衣料を販売して生計を立てた。クタラジャのオランダ語原住民学校、メダンのタマンシスワ学校で学んだ後、17歳でダウウェス・デッケルが経営するジャカルタのクサトリア学院（Ksatriaan Instituut）でジャーナリズムを専攻した。卒業後、メダンで日刊紙『シナール・デリ』（*Sinar Deli*、「デリの光」）編集者、ジャカルタの日刊紙『シンポー』（*Sin Po*、「新報」）の嘱託スタッフ、『ワルタ・ハリアン』（*Warta Harian*、「日報」）記者を歴任。『ワルタ・ハリアン』が治安かく乱のかどで停刊された後に、月刊紙『プルチャトゥラン・ドゥニア』（*Pertjatoeran Doenia*、「世界政情」）を創刊した。日本軍占領期は軍政ラジオ放送で英語放送のアナウンサーを担当した。インドネシア国民党党員でスカルノ主義者であり、軍事主義には反対していた。スハルト体制下で中華（Tionghoa）をチナ（Cina）に表記変更する政策に従わなかった。東欧諸国でインドネシア大使を歴任後、1968年に情報大臣に任命された。アブドゥッラーの父の出身地であるアチェ州ランサ出身の企業家M.ガニの親族でもあった。

た最初のインドネシア人女性[31]で、シンガポールで東南アジアの女性ジャーナリストの先駆者として知られていた。アブドゥッラーは、ディア夫妻がエジプト政府の招聘でエジプトに向かう途中でシンガポールに立ち寄った際に直接会って親交を深めた。

アブドゥッラーはシンガポールで刊行される英語紙とマレー語紙を毎日読み、インドネシアに関する記事を拾い集め、ジャカルタに航空便で送った。シンガポールの国際商業はインドネシアからの物品の輸出入によって支えられており、インドネシアの記事には事欠かなかった。他紙の転載だけでなく、アブドゥッラー自らも記事を執筆して雑誌『ムルデカ』に掲載された。

インドネシア政府の海外での評判に直結する話題を取り上げたアブドゥッラーの記事は、外交闘争と武力闘争を通じて国際社会の支持を得てオランダからの主権移譲を果たしたばかりのインドネシア政府の関心をひいた。インドネシア人船員によるオランダ船将官殺人事件は、シンガポール海域で発生したためにシンガポールで裁判が行われ、そのためインドネシアでは知られていなかった。これを取り上げたアブドゥッラーの記事は『ムルデカ』紙のスクープ記事となり、インドネシア政府は報道を受けてシンガポールのインドネシア領事にインドネシア船員の弁護の用意をするよう指示を出した。

インドネシア社会党党首でインドネシア共和国の初代首相を務めたスタン・シャフリルがイギリス海軍から購入したスピード・ボートが活用されていない現状[32]を伝えるアブドゥッラーの記事が雑誌『ムルデカ』に掲載された際には、B. M.ディアがジャカルタのインドネシア外務省に呼ばれて事情を聴取された。アブドゥッラーは十分な情報を集めてから記事にするつもりだったが、ジャカルタの新聞記者がこの件についてアブドゥッラーにインタビューしたいと問い合わせてきたため、インタビューされる前に記事にしたことで雑誌『ムルデカ』のスクープになった。

31) ヘラワティは米国でジャーナリズムと社会学を学んだアナウンサー。1942年8月にディアと結婚した際には結婚式にスカルノとハッタが参列した。夫とともに英語紙『インドネシアン・オブザーバー』(*Indonesian Observer*)を刊行した。

32) インドネシア共和国独立戦争の際にオランダがインドネシアの船舶に対してマラッカ海峡で海上封鎖を行い、それを突破する目的でシャフリルがアチェ人から資金を集めてイギリス海軍から二艘のスピード・ボートを購入した。一艘はロンドンから輸送中にスリランカ沖で沈没し、もう一艘はペナンに係留されたたまま朽ち果てようとしていることを伝えるものだった。

5. マレー人ジャーナリストとの交友

シンガポールの華語紙編集者との交友やインドネシアの雑誌や新聞への寄稿はあったものの、アブドゥッラーにはシンガポールのマレー人記者や作家と直接知り合う機会がなかった。ペナンのペンフレンド同盟の活動を通じて名前と住所を知っていたジミー・アスマラ(Jymy Asmara)[33]を探したが、会うことはできなかった。

アブドゥッラーがシンガポールのマレー人記者や作家と交流するようになったのは、アブドゥッラーが愛読していた雑誌『マスティカ』(*Mastika*、「宝石」)の辞書コーナーでレンチョン(rencong、アチェの伝統的な短刀)の説明に誤りがあることを見つけ、記事の執筆者で『マスティカ』の編集者だったアスラフ(Asraf)[34]に連絡をとったことがきっかけだった。

『マスティカ』は、1941年6月1日にウトゥサン・ムラユ社が創刊したジャウィ雑誌で、初代編集長は「マレー人ジャーナリストの父」と呼ばれるアブドゥル・ラヒム・カジャイ(1941年6月〜1941年12月在職)だった。刊行当初は論説、短編、詩などから構成され、マレー人の進歩と民族主義精神の普及を進める政治色が強かった。第二次世界大戦中の休刊を経て、1946年11月1日に「マレー語の月刊出版」をキャッチフレーズに復刊した際は、文芸だけでなく社会や歴史など広範な話題を取り上げ、硬軟とりまぜた紙面構成で読者の獲得をはかった。左派系の民族主義作家ハルン・アミヌルラシドのもとで人気作家を多数擁した週刊紙『ヒブラン』(*Hiboran*、「娯楽」)と人気を二分した[35]。

1948年には執筆者に原稿がわりに掲載誌を渡すほど経営状態が悪化したため、ウトゥサン・ムラユ社のユスフ・イスハクはクリス・マスを編集長に任命して『マスティカ』の立て直しを命じた。クリス・マスは人

33) 本名はJaffar Mohamad。1921年にジョホール州ムアルで生まれた。ASAS50設立時の19人のメンバーの一人。

34) アスラフは1927年スランゴール州ブキットロタン生まれ。両親はインドネシアからの移民。地元のマレー語小学校に通った後、クランの英語学校に進学した。幼少時からインドネシアとイギリスの書籍や雑誌を読みふけり、そこから政治に関心を持つようになり、アフマド・ブスタマム(Ahmad Boestamam)の青年政治運動APIに参加した。1949年末にシンガポールに移り、『ウトゥサン・ムラユ』の記者に採用された。詩や短編のほかに文芸批評を得意とした[Syamsuddin 2005: 237]。

35) 煽情的な記事のために『ヒブラン』が評判を落としたことや、週刊誌『ウトゥサン・ザマン』と日刊紙『ウトゥサン・ムラユ』を刊行するウトゥサン・ムラユ社の雑誌は強く、『マスティカ』が生き残った。

気があった恋愛小説と探偵小説を残して誌面を一新し、表紙をフルカラーにして、マラヤ内外の人気女優の特集を組み、自身も新たな筆名で[36]小説を寄稿した。『マスティカ』は売り上げを回復し、短編小説コンテストには200名を超える応募があった[37]。

アスラフは、1950年に設立されたシンガポールのマレー人による文筆家協会「50年世代」(Angkatan Sasterawan 50;ASAS50)[38]の事務局長であり、ASAS50の基本方針である「社会のための芸術」(Seni untuk masyarakat)を掲げた中心人物の一人だった[39]。ASAS50はマレー人作家の地位向上やマレー人の社会生活の向上をめざして活動を拡大し、クリス・マスやウスマン・アワン(Usman Awan)[40]といった文芸作家にとどまらず、記者や映画脚本家など多彩な経歴を持つ人々を集め、1951年末までにメンバーは100名を数えた。文芸活動と社会運動が一体化した背景には、1950年代にマラヤやシンガポールで急進的な政治活動が制限されたことを受けてマレー人活動家が拠点をシンガポールに移し、活動の主軸を文化社会運動に移したことがあった[Kahn 2006:114]。

インドネシアからの移民を父に持ち、幼少期からインドネシアの書籍や雑誌を読み、インドネシアに強いあこがれを持っていたアスラフは、同じくインドネシアの移民の家に生まれて独立革命期のインドネシアで活動したアブドゥッラーを慕い、二人は友人づきあいをするようになった。

アブドゥッラーの目には7つ年下のアスラフはマルクス主義に魅了されており、それは当時の典型的な若者世代の特徴であると映っていた。たとえば、アスラフは田舎のイスラム教師たちが他人の行動に厳しく自分の行動に甘いと批判し、イスラム教指導者全般に強い不信感を抱いており、イスラム教の信仰においてアブドゥッラーと考えが異なっていた。このことをアブドゥッラーは、アスラフが英語で中等教育を受け、理想主義と共産主義にあふれた西洋の本で育てられ、その後は『ウトゥサン・ムラユ』の同僚たちの急進的な思想を素直に吸収したためであると受け止めていた。

アスラフはアブドゥッラーの話し言葉がインドネシア人のようだといってアブドゥッラーを慕い、アブドゥッラーの勤め先に頻繁に立ち寄るようになった。アブドゥッラーの話し言葉がマレー人と違うという指摘を[41]、インドネシアへのあこがれを持つアスラフから言われたことで、アブドゥッラーはシンガポールのマレー人作家たちとつきあう自信をもつようになった。アブドゥッラーもアスラフとの会話を楽しみ、アスラフを喜ばせようと、シンガポールで成功しており言葉もよくできるインドネシア華人をアスラフに紹介した。

アスラフを通じてクリス・マスやウスマン・アワン、アブドゥル・サマド・イスマイル(A. Samad Ismail)[42]、フセイン・ジャヒディン(Hussein Jahidin)、バハルッディン・アリフ(Baharuddin Arif)、オスマン・ウォク(Othman Wok)[43]といったASAS50に参加するマレー

36) Mr. X. Abdul Samad IsmailやTengku Hassanなど。

37) クリス・マスがウトゥサン・ムラユ社の日刊紙である『ウトゥサン・ムラユ』のライバル紙『ムラユ・ラヤ』(*Melayu Raya*)に移籍したため、1953年から1955年までアスラフが編集を率いた。アスラフはマレー文化の発展への貢献を目標にかかげ、ウスマン・アワンとともに1954年から短編2編、言語・文学・文化欄、外国語短編の翻訳1編、詩2編という誌面構成に代えた。1958年にウトゥサン・ムラユ社はクアラルンプールに本社を移し、『マスティカ』誌編集部もクアラルンプールに移動した。

38) マレー語の教師、作家、記者ら19名によって1950年8月に設立され、顧問にはPKMMのブルハヌッディンとハルン・アミヌルラシドが迎えられた。呼称はインドネシアの作家運動「45年世代」(Angkatan 45)にならってつけられたもので、インドネシアの文芸活動に影響を受けている。

39) 設立時のメンバーで映画脚本家としても知られるハムザ・フセインが『ムラユ・ラヤ』紙に「芸術のための芸術」という記事を寄稿したのに対し、「社会のための芸術」を主張して反論記事を書いたのが『ウトゥサン・ムラユ』紙記者のアスラフだった。この論争をきっかけにASAS50の総会で「社会のための芸術」を方針とすることが議決された。

40) ウスマン・アワンは1929年7月12日にジョホール州コタティンギで貧しい漁民の子に生まれた。日本軍占領時に日本軍に徴用されてシンガポールで強制労働に従事。1946年から1951年までジョホールとマラッカで警察勤務。1951年に日刊紙『ムラユ・ラヤ』の植字工として採用され、その後記者になった。1952年にウトゥサン・ムラユ社に移り、同社の刊行する新聞・雑誌の編集に参加。トンカット・ワラン(Tongkat Warrant)の筆名で知られる。『マスティカ』編集は1950-1962年。1957年にクアラルンプールに移り、1985年まで言語図書局に勤務した。

41) 1960年代末以降に公刊されたアブドゥッラーの文芸作品には会話が少ないことが指摘されている。その原因の一つはアスラフのこの指摘かもしれない。

42) サマド・イスマイルは1924年にシンガポールでジャワ人移民の家に生まれた。父はシンガポールのマレー語小学校教師で、『ウトゥサン・ムラユ』の記者見習いをしていた頃にアブドゥル・ラヒム・カジャイの指導を受けた。日本軍占領期には日本軍のもとで刊行された『ブリタ・マライ』の編集長を務めた。インドネシア独立闘争を支援し、インドネシアへの武器供与に関わった。イギリスのシンガポール復帰後は『ウトゥサン・ムラユ』の副編集長となったが、1951年に共産党支援の疑いでイギリスに逮捕され1953年まで拘留された。『ウトゥサン・ムラユ』編集長だったユスフ・イスハクはサマドの弁護にリー・クアンユーをつけた。リー・クアンユーの人民行動党(PAP)に参加したが、1957年にマラヤが独立してウトゥサン・ムラユ社がクアラルンプールに移転した際にユスフ・イスハクとの関係が悪化し、サマドはクアラルンプールへは行かずにジャカルタ特派員となった。

43) 3名とも『ウトゥサン・ムラユ』記者。フセイン・ジャヒディンはのちに『ブリタ・ハリアン』の編集者となる。サマド・イスマイルの左派思想の影響を受けてマレー人に共産主義思想を喧伝しようとしたかどで1976年にシンガポール政府に逮捕された。

人の作家や記者たちと交流する中で、アブドゥッラーもASAS50の一員と目されるようになった。

6. カラム社に参加する

アブドゥッラーがカラム社に参加するきっかけは映画雑誌だった。1950年代のシンガポールにはマレー・フィルム（Malay Film Productions）[44]、キャセイ・クリス（Cathay Keris Film Productions）[45]、ヌサンタラ・フィルム（Nusantara Film）[46]の3つの映画製作会社があり、映画産業が興隆していた。映画産業の振興とともにマレー語による映画専門誌が刊行されるようになっていた[47]。

インドネシアの貿易政策の変化によりインドネシアとの貿易業に苦労していた[48] オスマン・アダミから貿易以外の事業はないかと尋ねられ、アブドゥッラーがこれからは映画だと答えたところ、オスマン・アダミはただちにエンピリック・フィルム社（Empiric Film Company）を設立してアブドゥッラーを社長にした。アブドゥッラーは撮影用のカメラを購入し、脚本を構想して映画制作の準備を進めた。エンピリック・フィルムから作品を世に出すには至らなかったが[49]、この活動をきっかけにP.ラムリー[50]とも親交を深めた。P.ラムリーとアブドゥッラーの初対面はアブドゥッラーがシンガポールに到着して間もないころにさかのぼる。オスマン・アダミの会社の宿舎の隣にマレー・フィルムの借り上げ宿舎があり、マレー映画の女王と呼ばれたカスマ・ブーティが住んでいた。映画俳優たちが出入りしており、アブドゥッラーの父がアチェ人ということもあって、同じくアチェ人の父を持つP.ラムリーを紹介された。アブドゥッラーはP.ラムリーとの親交を通じて映画スタッフや監督とも交友するようになった[51]。

1953年はじめごろにオスマン・アダミから会社の経営が危なくなったと伝えられ、アブドゥッラーは本格的に職探しを始めた[52]。ちょうどそのころ、ジャミル・スロン（Jamil Sulong）[53]とジャアファル・アブドゥッラー（Jaafar Abdullah）に映画雑誌『ビンタン』（*Bintang*、「スター」）の刊行・編集を手伝ってほしいと頼まれた。『ビンタン』は「映画、ラジオ、スポーツのためのマラヤにおけるマレー語雑誌」を宣伝文句に、5人の映画俳優が100ドルずつ出資して1953年3月10日に創刊した。映画『スジョリ』（1951年）や『ジュイタ』（1951年）で主演を果たしてマレー・フィルムの看板俳優になっていたP.ラムリーを主宰者にかかげ、P.ラムリーの連載記事を掲載した。『ビンタン』創刊号の印刷は華人系のスンセン社（Soon Seng Press）で印刷され、近くにはムラユ・ラヤ社やカラム社もあった。アブドゥッラーは『ビンタン』の編集を引き受けた。マレー語の娯楽雑誌が待望されるなかで刊行されたことやP.ラムリーの人気の高まりもあり、5,000部が売れる人気を博したが、刊行の遅れやずさんな経理のために刊行継続が難しくなった。

アブドゥッラーを通じて支援を申し出たアスラフが編集に加わり、アスラフのもとで『ビンタン』は誌面を一新して刊行を継続し、アブドゥッラーもそれを手伝った。アスラフは「社会のための芸術」の一環として映画産業とP.ラムリーの人気に目をつけ、映画を通じて貧困や不平等の問題を社会に訴えようとした。1954年4月にアブドゥッラーは『ビンタン』の経営をアスラフに任せ、自らはカラム社に移り、1954年2月にカラム社が創刊した『フィルム』（*Filem*）の

44）1937年にショウ兄弟により設立された。1967年に閉鎖するまで159作品を制作した。

45）1953年にHo Ah LokeとLoke Wan Thoにより設立された。1975年に閉鎖するまで60作品を制作した。Hoは1952年にHarimau Film Productionsを設立した。1956年に資産家Loke Wan Thonが所有するCathay Organisationに合流し、社名をCathay Keris Film Productionsに変えた。

46）資産家でマラヤに数多くの劇場を保有していたOng Keng Huatが1951年に設立した。

47）たとえば1951年4月28日創刊の『フィルム・ラヤ』（*Film Raya*）。

48）1950年ごろに会社が借りている船がアチェ州ロスマウェの港で荷物を積んだままインドネシア国軍に差し押さえられていた。オスマン・アダミは船の持ち主に多額の賠償金を支払った。アチェではインドネシア共和国政府が主権を獲得した1950年に貿易政策が整備され、スマトラの国際貿易港にメダンが指定され、他の港からの輸出入が認められなくなっていた。

49）エンピリック・フィルムが購入した撮影用カメラは高性能だったために他の映画会社の関心をひいた。アブドゥッラーはカメラのレンタルを条件にアブドゥッラーの脚本をHo Ah Lokeと共同制作で映画化する道を探していたが、オスマン・アダミが撮影用カメラをヌサンタラ・フィルムに売却したため、アブドゥッラーの脚本を映画化する話は立ち消えになった。

50）P.ラムリーは1929年ペナン生まれの映画俳優・映画監督。父はアチェ州ロスマウェ出身のアチェ人。1948年にマレー・フィルム制作でインド人のクリシュナ監督によるマレー語映画『チンタ』（Cinta、「愛」）で映画デビューして人気を伸ばし、1950年の映画『献身』（Bakti）でP. ラムリーが歌った歌がラジオ・マラヤで放送され、アブドゥッラーも耳にしていた。

51）後にマレー語映画初のカラー映画『ハントゥア』の制作に技術提供者として参加している。

52）1953年1月にオスマン・アダミはジャカルタに靴などの雑貨を密輸したかどで500ドルの罰金を受けた。

53）1926年8月6日、ジョホール州生まれ。短編、詩、マンガなどを執筆し、ウスマン・アワンらとともに1950年にASAS50を設立した。通訳としてマレー映画社で働くようになったことがきっかけで、助監督、さらには監督を手掛けるようになり、生涯に31本の長編作品を監督した。

編集者になった[54]。

1950年８月に月刊『カラム』を創刊したエドルスのカラム社は、1953年から他の雑誌の刊行も手掛けるようになっていた。1953年４月には児童向け雑誌『こども』(*Kanak-kanak*)、1953年８月にはマラヤ内外のニュースと芸術・文化・歴史・ビジネス・社会福祉など多彩な分野の記事を掲載することをうたった週刊『ワルタ』(*Warta*)を創刊した。

1953年10月末にジョホール・バルのUMNO青年部は『カラム』と『ワルタ』をマレー人の敵であると糾弾して両誌を燃やし、購読をボイコットするよう呼びかけた[The Straits Times, 1953. 10. 30:1]。これを契機に両誌の購読者数は激減し、同年『ワルタ』は停刊した[山本 2002:261]。読者確保のための打開策の一つが1954年２月に創刊された『フィルム』(*Filem*)だった。アブドゥッラーは『フィルム』の編集長として月給150ドルの好待遇で1954年６月に迎え入れられた。インドネシアの『ムルデカ』紙への寄稿も続けており、他の会社のアルバイトとあわせて暮らしていくには十分だった。

エドルスはアブドゥッラーに『カラム』の文体で書くよう求めた。アブドゥッラーが『カラム』の文体とは何かと尋ねると、エドルスは「君の文章はとてもよい。ただしザアバには嫌われる」と答えた。アブドゥッラーが自分が辞めてザアバに仕事をさせればよいと訴えたところ、エドルスは自身が赤字を入れたアブドゥッラーの原稿を捨て、アブドゥッラーの仕事に口出ししなくなった[55]。

アブドゥッラーはカラム社の他の雑誌の編集も担当するようになった。『ワルタ』の後継誌『ワルタ・マシャラカット』や成人向け娯楽雑誌『アネカ・ワルナ』(*Aneka Warna*、「色とりどり」)だった[56]。1954年11月にメダンでインドネシア国語会議が開催されると、アブドゥッラーは『ワルタ・マシャラカット』代表としてクリス・マスや他のシンガポール代表とともに参加し、国語会議についての記事がアブドゥッラーの署名入りで『カラム』に３回にわたって連載された。

7. マレー人ジャーナリスト協会

1955年１月にサイド・オマル・アルサゴフ(Syed Omar Alsagoff)の家でマレー人記者の会合があり、シンガポール在住のマレー人ジャーナリスト63人[57]によってサマド・イスマイルを会長とするマレー人ジャーナリスト協会(Persatuan Wartawan Melayu)が結成された。当時シンガポールには英語紙、マレー語紙、華語紙のジャーナリストが参加するシンガポール・ジャーナリスト協会(Singapore Union of Journalist)や華語紙のジャーナリストの集まりがあり、マレー人ジャーナリスト協会はシンガポールのジャーナリスト協会のなかでも最後にできたものだった。

アブドゥッラーも『カラム』の記者として参加し、事務局メンバーとなった。参加しなかったのはカラム社のエドルスとアブドゥッラー・バスメ、そして『ヒブラン』や『ムティアラ』、『ファッション』、『ベリア』(*Belia*、「若者」)の編集長だったハルン・アミヌルラシドだった。エドルスの不参加の背景にはカラム社とウトゥサン・ムラユ社とのあいだの長年にわたる因縁があった。エドルスは宗教問題について強い信念があり、ときに『ウトゥサン・ムラユ』を反宗教的であると批判した。アスラフが『マスティカ』に書いた記事をめぐっては、法廷闘争や個人攻撃も辞さなかった[Abdullah 1985: 547-548][58]。

『カラム』では「ムラユ(マレー人)記者協会がシンガポールで結成される」[*Qalam* 1955.2.: 6-7]と報じられた[59]。民族主義を基本理念とし、民族主義の意味は民族独立の獲得と記者の個別の政治理念に影響されることなく明白な人間の基本的権利の獲得に関与する精神であるとされた。また、個別目標として、①マレー記者の団結と他の記者との関係の強化、②民主主義の基本である表現の自由の護持、③社会の

54)『ビンタン』は1955年１月に『雑誌ビンタン』と改名し、サレ・ハジ・アリの出資のもと、アスラフの妻のファティマ・ムラド(Fatimah Murad)やジミ・アスマラの編集のもとで刊行が継続された。『ビンタン』はASAS50と同じ建物に事務所があった[Harding 2002:103]。

55)エドルスはアブドゥッラーの手をとり、「君にはやめてほしくない、私はただ助言しただけだ」と伝えたという。

56)『ワルタ・マシャラカット』の編者はエドルスとアブドゥッラーに加えてアフマド・フシン(Ahmad Hussin)とアブドゥッラー・バスメ(Abdullah Basmeh)だった[Hamedi 2015:137]。『ワルタ・マシャラカット』は読者を取り戻すことができずに1955年に停刊した。『アネカ・ワルナ』は刺激的な写真や人気作家アヌアルの小説で若者に人気となり、一時は飛ぶように売れたが、アヌアルの小説が掲載されなくなると売り上げが急落し、1955年ごろに停刊した。

57)『ウトゥサン・ムラユ』、『ストレーツ・タイムズ』、『ムラユ・ラヤ』、『ワルタ・ヌガラ』、『ラジオ・マラヤ』、『ヒブラン』、『ビンタン』、『ファッション』、『グリガ』など。

58)タリブ・サマドはエドルスがマレー人ジャーナリスト協会に不参加だった理由の一つとして、テンプラー将軍との会合をめぐるサマド・イスマイルとの見解の不一致をあげている[Talib 2002: 4]。

59)記事に署名はないが、『カラム』から参加したアブドゥッラーの記事と思われる。

要請に即したマレー語ジャーナリズムの質と地位の向上、④マラヤのマレー語新聞の発展が掲げられた。メンバーとなる要件は、「マラヤ（シンガポールを含む）で出生したか移住してきたかを問わずマラヤを祖国と思いマラヤの一体性を損なわない者」とされた。

マレー人ジャーナリスト協会はシンガポールとジョホールのマレー語記者を糾合する社会組織であり、その趣旨が明らかになると、エドルス、ハルン・アミヌルラシド、アブドゥッラー・バスメの３人も会員となった。エドルスとアブドゥッラー・バスメが会員になったのはアブドゥッラーがカラム社に勤めるようになってからで、アブドゥッラーはサイド・オマル・アルサゴフの後押しと自分の誘いが彼らの参加を助けたと自認している。かつて顔をあわせることもはばかられる関係だったアスラフとエドルスが同席しているのを見るのは感無量だったという。

８. 地元メディアをつくる

アブドゥッラーは、地元の記事や話題を掲載した新聞・雑誌が必要であると考えていた。アブドゥッラーにとって、マレー語新聞である『ブリタ・ハリアン』は英語新聞である『ストレーツ・タイムズ』（*The Straits Times*）の翻訳に過ぎず、地元の新聞としては不完全だった。

⑴インドネシアの雑誌『ワクトゥ』のマラヤ進出

マラヤとシンガポールで多くの人に読まれていたインドネシアの雑誌に『ワクトゥ』（*Waktu*、「時」）があった。「インドネシアで最初の写真付きニュース雑誌」という触れ込みで、1947年12月にメダンで創刊された。誌名からも明らかなように、写真を用いた表紙とその内容は、1923年にアメリカで創刊された世界初のニュース雑誌『タイム』（*Time*）を彷彿させる構成になっていた[60]。創刊したのはメダンを拠点に文芸活動を行っていたザハリ（Zahari）だった。1948年には『ワクトゥ』はマラヤとボルネオ北部に読者を獲得していた。

ザハリは第三回マレー語会議[61]にインドネシア代表団の一員として参加し、『ワクトゥ』のマラヤ版の刊行を考えるようになり、アブドゥッラーに手紙で助言を求めた。アブドゥッラーは、以前ザハリの出版社に小説「ジャスミンの花のごとく散る」（Gugur Bagai Melati）を寄稿していた。また、アブドゥッラーがインドネシア独立戦争中にペナンにいたときに、そこで『ワクトゥ』の販売代理をしていたことがあった。ザハリはインドネシア政府から資金援助を受けるためにマラヤ版『ワクトゥ』の実現可能性について口添えしてほしいとアブドゥッラーに求めた。アブドゥッラーはつぎのように返信した。

> マラヤ版『ワクトゥ』が刊行されればこの上なく喜ばしい。ただ、望むべくは、マラヤの諸問題を第一に扱ってほしい。インドネシア版『ワクトゥ』の写しではなく、だ。それが実現すれば『ワクトゥ』はこの地で歓迎される。それが無理なら新たに刊行されるに及ばない。今のままで十分だ。インドネシア政府からの助成金はインドネシア版『ワクトゥ』の質向上に使えばよろしい。友人として、あなたが賭けに負けた人の様にインドネシアに帰るのを見たくない。
>
> [Abdullah 1985：744]

ザハリはインドネシア政府から15万ドルの助成金を得てシンガポールでの『ワクトゥ』刊行に取り組み、アブドゥッラーは創刊の準備を手伝った。インドネシア政府の助成金はシンガポールに設置されたばかりのインドネシア銀行を通じて送金された。インドネシア銀行は資金の使い方に干渉し、ザハリが住むべき家や買うべきものをあれこれ指示してきた。『ワクトゥ』には不釣り合いな中古の大型印刷機を買うよう求めてきたりした。アブドゥッラーとアフマディ・ハッサン（Ahmady Hassan）が編集や出版を手伝い、ジャウィのタイプライターを購入した。アチェの北部の町ロクスコンから保安隊事件後にシンガポールに避難してきたリー（Lee）一家が活字を組んだ。

その頃、英語紙『ストレーツ・タイムズ』がマレー語の新聞を刊行しようとしてインドネシア人の編集者探しをザハリに依頼したことがあった。インドネシア人編集長に800ドル、マラヤ人編集補佐に600ドルという話だった。ザハリは、メダンの日刊紙『ミンバル・ウムム』（*Mimbar Umum*、「公共論壇」）[62]のシャムスディン・マナン（Shamsuddin Manan）とアブドゥッラーに声をかけた。２人は翻訳が主な仕事と

60）アブドゥッラーによれば、紙面があまりにも似ていたことから『ワクトゥ』は『タイム』誌に訴えられたが、『タイム』側が敗訴したという。

61）1956年９月16日から６日間にわたってジョホール・バルとシンガポールで開催された。この会議の様子は『ワクトゥ』で数回にわけて報じられた。

62）1945年11月に創刊され、現在まで刊行が継続されている。

知って断った。マレー語で新聞を出す以上は英語紙のコピーでは意味がないというのがシャムスディンとアブドゥッラーの考えだった。

アブドゥッラーは、『ワクトゥ』がインドネシアで売れているからといってマラヤでも売れると見込むのは間違っていると考えていた。ザハリはアブドゥッラーの助言を聞かずに創刊号を5,000部印刷した。マラヤ各地の販売代理店はザハリに部数を増やすよう求め、第２号は7,500部印刷された[63]。新しい販売代理店も名乗りをあげた。当時、新しく新聞や雑誌が刊行されると、実際の売れ行きと関係なく販売代理店は出版社に部数を多めに注文することがよく見られた。販売代理店は売れた分だけ金を払い、売れ残りは出版社に戻される。出版社が代金の回収をする前に次号を刊行した結果、資金繰りがつかなくなって倒産することがしばしばあった。販売代理店は出版社が早く潰れれば代金の回収がされないので得をすると考えている節があった。『ワクトゥ』にも同じことが起こった。

マラヤ鉄道から『ワクトゥ』の大量返品の通知があり、売れ残りが鉄道会社の倉庫に積み上げられた。借金を抱えたザハリはシンガポールにいられなくなり、印刷所をアフマディに預けて去り、ほどなくしてアフマディは印刷所を閉めた。

⑵日刊紙『スムナンジュン』(1958-1959年)

1957年８月31日にマラヤがイギリスから独立すると、1958年２月に『ワルタ・アハド・スムナンジュン』(*Warta Ahad Semenanjong*、「半島の日曜日の報せ」)がサイド・イブラヒム・アルサゴフの出資により創刊された。スムナンジュンとはマレー語で半島を意味し、マラヤの別称だった。マラヤとその民族に誇りを与え、イスラム教徒の声を代弁することが刊行の意図として掲げられた[64]。

1958年３月には『ワルタ・アハド・スムナンジュン』の日刊紙『スムナンジュン』(*Semenanjung*、「半島」)が創刊された。「自由の新聞」を自認し、創刊に際して以下の言葉を寄せた。

> この新しい新聞は中道を歩みます。左にも右にも傾かず、マラヤ、シンガポール、そしてムラユ・ラヤと呼ばれるムラユの島々の民(jelata)に希望・利益・福利・安寧の指針となります。　[Hamedi 2015: 155]

編集長は民族主義思想で知られたイスハク・ハジ・ムハンマド(Ishak Haji Muhammad)で、編集者にはアブドゥッラーのほかに、社会主義に共感するアブドゥッラー・マジド(Abdullah Majid)、正統派イスラム思想のアブドゥッラー・バスメ、中庸なイスラム教信仰を支持するアブドゥッラー・ザワウィ(Abdullah Zawawi)、特定の主義・思想を持たないイブラヒム・レゴリ(Ibrahim Legori)というように、さまざまな考え方の人々が他の新聞・雑誌から集められた。そのため、編集部内の意見が統一されないまま、担当編集者によって中国の表記が「中華人民共和国」と「共産主義中国」でぶれることもあった。

『スムナンジュン』は、ジャウィ表記のマレー語新聞として当初まずまずの評判を得た。当時はマレー語の新聞といえば『ウトゥサン・ムラユ』のみで、それ以外は英語新聞の『ストレーツ・タイムズ』を翻訳したローマ字表記のマレー語新聞『ブリタ・ハリアン』があった[65]。

当時の話題は２つあった。一つは、カウム・ムダとカウム・トゥアの間に論争をもたらしたイスラム法審判問題(masalah khilafiah)で、もう一つはインドネシアを席巻していた反乱である。スカルノ大統領に不満を持つ政党の指導者たちが1958年にスマトラ島のブキティンギでインドネシア共和革命政府を樹立し、ジャカルタのインドネシア共和国政府への不服従を訴えた。スマトラで取材する外国人記者によって革命政府側の主張が大々的に報じられた。当時、外電の受信を担当し、戦場から伝えられるニュースを選定する仕事をしていたアブドゥッラーは、革命政府による反乱は戦争ごっこのようだという印象を持った。インドネシアの国民的指導者たちの身内どうしの争いから始まったもので、革命政府側はインドネシア共和国軍の戦艦から砲撃を受けて初めて自分たちが戦争をしていることを自覚したようにアブ

63) 1956年11月創刊。インドネシア版『ワクトゥ』によれば創刊号の発行部数は50部、第２号は750部であり、アブドゥッラーの記憶と異なっている[Waktu 1957.2.9: 3]。なお、[Hamedi 2015: 152-153]によれば、インドネシアの『ワクトゥ』のマラヤ版創刊とほぼ同じ時期に「北部マラヤの民族週刊誌」を標語に掲げたジャウィ表記マレー語雑誌『ワクトゥ』がクダで創刊されている(1957年３月停刊)。[Abdullah 1985]にもクダの『ワクトゥ』について記述があり、そこでは1958年以降に創刊されたことになっている。

64) 社会、スポーツ、ラジオ番組表、娯楽、映画レビュー、誌説、国内ニュース、外国ニュース、宗教論壇、短編小説、婦人、中東情勢などから誌面が構成された[Hamedi 2013: 154]。

65) サイド・イブラヒム・アルサゴフはこのほかに英語誌『イスラム世界』(*Islamic World*)、アラビア語誌『アル・イスラーム』(*Al-Islam*)を創刊した[Hamedi 2013: 154]。

ドゥッラーには見えていた。

『スムナンジュン』は、マラヤで地位を確立していたマレー語紙『ウトゥサン・ムラユ』に対抗して、サバ、サラワク、ブルネイに読者を広げようとしたが、全国紙をめざすには資金が不十分だった。マラヤ域外の読者の関心をひくには各地のニュースを掲載する必要があったが、地方特派員はジョホールとペナンに一人ずつしかいなかった。紙の入手に苦労し、掲載できる記事は限られていた。地方への配送は他紙に比べて遅れがちで、送料も新聞の値段より高くなった。

アブドゥッラーは編集会議でしばしば物議をかもす提案をした。あるときは「ラクダはアラブだけでなくオーストラリアや中国、パキスタン、アメリカにもいる」と発言してバスメを怒らせた。金曜日の宗教欄を担当するバスメがアラブ的なものなら何でも報じるという態度だったことにアブドゥッラーは不満を持っていた。あるときは、全国紙をめざすという高い理想が実現されず、かわりに出資者であるサイド・イブラヒム・アルサゴフの機嫌をうかがって彼の写真ばかり掲載されていると批判した。数日後にアブドゥッラーは解雇された。『スムナンジュン』はほどなくして停刊となり、編集者たちはそれぞれ『カラム』や『ブリタ・ハリアン』などの古巣に戻っていった。

9. 結び――マラヤの独立とクアラルンプール行き

大衆小説の「本場」であり父の生地でもあるスマトラで日本占領期からインドネシア独立革命期を過ごしたアブドゥッラーは、青年たちがさまざまな新しい取り組みに挑戦する時代状況の中、短編小説の執筆、新聞・雑誌の刊行、演劇、貿易業などを手掛けて経験を積んだ。

インドネシア独立に伴うインドネシアでの滞在許可の問題が発生し、難を避けるかたちでシンガポールに拠点を移した後は、華人を多数派とする混成社会シンガポールで華人ともつきあいながら、独立革命期の経験とマラヤ・シンガポールとスマトラの双方に知己を持つネットワークを生かして編集・著述業で実績を積んだ。

アブドゥッラーは、それぞれの土地で雑誌・新聞への寄稿や小説執筆を行うにあたって、スマトラではマレー語なまりのインドネシア語といわれ、シンガポールではインドネシア語なまりのマレー語と言われてきた。そのため、アブドゥッラーは自分の言葉遣いが常にどこか間違っているのではないかと考えてきた。これはアブドゥッラーがどの土地においても越境者であったためである。アブドゥッラーが、インドネシアとして独立したスマトラとも生地であるマラヤとも一定の距離を置きながら、それぞれとのつながりを維持して10年余りを過ごすことができた場所が、「カラムの時代」のシンガポールであった。

1950年代末、シンガポールの雑誌刊行業の経営不振が続く中、アブドゥッラーは次第に翻訳に関心を移し、1961年にクアラルンプールに拠点を移してオクスフォード大学出版局に勤めるようになる。マレーシア国民文学者に列せられるのは、この後に言語図書局への転職、コタキナバル赴任、そして長編小説『連結』や『イマーム』の執筆を経てのことである。どの土地にも帰属しきれない越境者であるアブドゥッラーは、マレー人、華人、インド人の三民族を同等の扱いで登場させたうえでそれらの連携を描いた『連結』と、社会におけるイスラム教の役割を描いて1970年代以降のイスラム小説の先鞭をつけた『イマーム』を経て、マレーシア国民文学を代表すると者と認められた。このことの意味については稿をあらためて検討したい。

参考文献

篠崎香織 2020「1950～1960年代のシンガポールにおける華語文芸世界とマレー語文芸世界との交差」光成歩・山本博之編著『『カラム』の時代XI――マレー・イスラム世界の女性と近代』(CIRAS Discussion Paper No. 92)、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 61-74。

――― 2021「マレー世界における華語作家の国家構想――ルー・ポーイエと1940年代のインドネシア文芸界」光成歩・山本博之編著『『カラム』の時代XII――マレー・イスラム世界の社会変容と女性』(CIRAS Discussion Paper No. 101)、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 61-69。

坪井祐司 2014「宗教の制度化、民族の制度化――1950年代前半のマラヤ政治と『カラム』の戦略」『マレーシア研究』3、pp. 29-46。

――― 2016「1930年代初頭の英領マラヤにおけるマレー人性をめぐる論争――ジャウィ新聞『マジュリス』の分析から」『東南アジア　歴史と文化』45、pp. 5-24。

西芳実 2020「アブドゥッラー・フサインの子ども時代――英領マラヤの覗き見を通じたメディア

体験」光成歩・山本博之編著『「カラム」の時代XI——マレー・イスラム世界の女性と近代』(CIRAS Discussion Paper No. 92)、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 54-60。

——— 2021「アブドゥッラー・フサインのペナン時代(1939〜1941年)——英領期マラヤの結社と出版」光成歩・山本博之編著『「カラム」の時代XII マレー・イスラム世界の社会変容と女性』(CIRAS Discussion Paper No. 101)、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 51-60。

山本信人 1995「メダンのロマン・ピチサン——1930年代末インドネシア文化地図と大衆小説をめぐる政治」『法學研究:法律・政治・社会』68(11)、pp. 147-179。

山本博之 2006『脱植民地化とナショナリズム——英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会。

——— 2010「選挙と反乱——インドネシアの1955年総選挙の分析記事」山本博之編『「カラム」の時代——マレー・イスラム世界の「近代」』京都大学地域研究統合情報センター、pp. 26-33。

Abdullah Hussain 1965. *Terjebak*. Singapura: Pustaka Nasional; Kuala Lumpur: Pustaka Antara.

———. 1965. *Peristiwa*. Kuala Lumpur: Pustaka Antara.

———. 1985. *Sebuah Perjalanan*. (Edisi Kedua). Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

———. 1989. *Peristiwa Kemerdekaan di Aceh*. Jakarta: Balai Pustaka.

Ahmad Sarji. 1999. *P. Ramlee, Erti yang Sakti*. Selangor: Pelanduk Publications.

Budiawan. 2012. "Sibling Tension and Negotiation: Malay(sian) Writer-Political Activists' Links and Orientation to Indonesia". Jennifer Lindsay & Maya H. T. Liem (eds.) *Heirs to World Culture: Being Indonesian 1950-1965*. Leiden: KITLV Press. pp.143-162.

Ghani Jusuoh & Ibrahim Abu Bakar. 2011. "Islamic Teachings in the Modern Malay Novel Interlok." *International Journal of Business and Social Science*. 2 (11). pp.25-28.

Hamedi Mohd Adnan. 2013. *Majalah Melayu Selepas Perang: Editorial, Sirkulasi dan Iklan*. Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Malaya.

Hamedi Mohd. Adnan. 2015. *100 Akhbar Melayu*. Kuala Lumpur: Legasi Press.

Hasan Saleh. 1992. *Mengapa Aceh Bergolak: Bertarung untuk Kepentingan Bangsa dan Bersabung untuk Kepentingan Daerah*. Jakarta: Pustaka Utama Grafiti.

Harding, James & Ahmad Sarji. 2002. *P. Ramlee: The Bright Star*. Selangor: Pelanduk Publications.

Kahn, Joel S. 2006. *Other Malays: Nationalism and Cosmopolitanism in the Modern Malay World*. Singapore: NUS Press.

Maman S. Mahayana. 2001. *Akar Melayu: Sistem Sastra & Konflik Ideologi di Indonesia & Malaysia*. Magelang: Indonesiatera.

Reid, Anthony. 1979. *The Blood of the People: Revolution and the End of Traditional Rule in Northern Sumatra*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Rosnah Baharudin. n.d. "Autobiografi Abdullah Hussain: Perjalanan Panjang Seorang Pengarang Melayu". Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

Yong Mun Cheong. 2003. *The Indonesian Revolution and the Singapore Connection: 1945-1949*. Singapore: Singapore University Press.

Syamsuddin Jaafar. 2005(2008). *Biografi Penulis Wajah Edisi Ketiga*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

Talib Samat. 2002. *Ahmad Lutfi: Penulis Penerbit dan Pendakwah*. Selangor: Dewan Bahasa dan Pustaka.

Zeti Aktar Jaffar (ed.) 2008. *Abdullah Hussain dalam Esei dan Kritikan*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.